

公益財団法人
日本中国国際教育交流協会

【2019年度の歩み 会報第26号】



■派遣

■受入

■支援

■研究等助成

視察研修団

第5次宋慶齡基金会教育交流代表团

第4回日中音乐教育交流会

東平県音乐教育支援

第8回ホームステイ（神奈川）

第5回日中教育文化シンポジウム

第15回日本語作文コンクール

2020年3月発行

目 次

■表紙写真	
【左上】	視察研修訪中団（中国宋慶齡基金会）
【右上】	第4回日中音楽教育交流会（笛吹市立春日居小学校）
【左下】	第8回ホームステイ in 神奈川（相模原教育会館）
【右下】	第5回宋慶齡基金会教育交流代表団（富士川町立増穂中学校）
■卷頭言 公益財團法人日本中國國際教育交流協会 代表理事 黒田文男	2
■視察研修訪中団（教育交流・派遣事業）	3
(1) 実施要項	3
(2) 参加者名簿・日程表	4
(3) 訪中団感想文	5
■第5次宋慶齡基金会教育交流代表団・第4回日中音楽教育交流会（教育交流・受入事業）	13
(1) 実施要項	13
(2) 代表団名簿	15
(3) 第4回日中音楽教育交流会	16
(4) 挨拶（代表理事・代表団団長）	19
(5) 代表団員感想文	21
■山東省泰安市東平県音楽教育支援（教育交流・支援事業）	28
(1) 2019年度教育支援に関する協定書	28
(2) 東平県音楽教育支援報告	29
(3) 楽器購入リスト	29
(4) 訪日代表団支出報告	29
■第8回教育交流ホームステイ in 神奈川（教育交流・研究等助成事業）	30
(1) 実施要項	30
(2) ホストファミリー・留学生名簿	30
(3) ホストファミリーからの報告	31
(4) 留学生からの報告	33
■第5回日中教育交流シンポジウム（教育交流・研究等助成事業）	39
(1) シンポジウム実施要項	39
■第15回日本語作文コンクール（教育交流・研究等助成事業）	40
(1) 教育賞受賞作品	
「絵の中のお兄ちゃんとイチゴ」 韓若冰（大連外国语大学）	40
「十二年後の桜の夢」 林 錦（上海海事大学）	41
■資料	43
(1) 会報「共生力」 30号、31号	43
■機関関係	47
(1) 2018（平成30）年度事業報告	47
(2) 経過報告	48
(3) 2019（平成31）年度事業計画	50
(4) 2019（平成31）年度収支予算書	51
(5) 2019（平成31）年度役員・評議員・公益事業審査員名簿	53
■協会の歩み	54
■編集後記	



卷頭言

公益財団法人日本中国国際教育交流協会

代表理事 黒田 文男

公益財団法人日本中国国際教育交流協会の事業に対しまして、日頃より多くの方々の励ましやご支援を賜り心から御礼申し上げます。

民主主義の基本的理念のひとつに自助を前提にした共助・公助の考え方をどこまで共有するかということがあります。また、其々の歴史・宗教を背景にした国の成り立ちの中で人々の生き方の違いを尊重することは最も大切にされるべきことだといえます。

世界を概観すれば、社会経済システムは資本主義に基づいており、グローバル化の急進により、人と物の交流が国を超えて行きかっています。資本主義のシステムは、「能力主義の資本主義」と「国家主義の資本主義」に大別されていますが、両システム共に、格差社会などの問題が顕在化しています。また、ナショナリズムを背景とした自國主義に陥っている感も否めません。

当会の活動の主旨は、互いの国の文化・歴史の違いを認め、「人と人の交流」を前提にした信頼関係を構築することにあります。

手立て・方策は互いの「教員の交流」を通じ教育振興をもって図ることによります。

当会と中国宋慶齡基金会との共同プロジェクトは、国を超えての「人と人の交流」であるとともに、得られる教育成果には大きなものがあります。

一方、日本と中国の若者意識に焦点を当て、両国の歴史性をふまえた「日中教育文化交流シンポジウム」は、作年度日本へ留学している中国の青年、日本の若い教職員等が多数参加し盛会に催すことができました。今年度は、諸般の事情により残念でありましたが中止しました。

今後、日中の懸け橋となる若者同士の交流が互いの国の歴史を直視し、その上で、自分たちがどの様な役割を担えるかという狙いの基に進めてまいります。

日本と中国、「明日を担う子どもたちの健やかな成長」のために、「人と人の交流」をより密にし「日中友好」の一助になれるよう努めてまいります。

当会は、教育の振興を目的とした公益財団法人であります。

今後とも、多くの都道府県の教育関係者の方々のより一層のご支援を賜りますことを深甚よりお願い申し上げます。

視察研修訪中団（教育交流 派遣事業）

視察研修訪中団は、9月6日（金）から8日（日）までの日程で、北京市で行いました。理事・評議員を中心にお名前で9名の参加で実施しました。中国側の受け入れは、宋慶齡基金会で、あらかじめ基金会と打ち合わせる中で、中国宋慶齡基金会表敬訪問、宋慶齡青少年科技文化交流センター施設見学、宋慶齡基金会幼稚園見学・意見交換・教育交流等を精力的に行うことができました。また、北京市内の見学は、国立博物館・天安門広場等を中心に史跡・資料等について研鑽を深めました。しかし、7日（土）が、国慶節のリハーサルということで、天安門・故宮博物院を中心に、夕方から外出禁止令がしきれ、宿泊ホテルから一步も外に出られないという「貴重な体験」をすることになりました。そんなわけで、当初計画していた、宋慶齡故居・人民大会堂の見学はできなくなってしまいました。さらに今視察団はアクシデントが続きました。「日本を“台風15号”が直撃する」という予報で、東京方面への飛行機がすべて欠航となってしまい、北京にもう一泊することとなってしまいました。宋慶齡基金会の宿泊施設（ホテル）に泊まり、結果としてさらに研鑽を積むことはできましたが…。いずれにせよ、中身の充実した視察研修になりました。



（1）公益財団法人日本中国国際教育交流協会視察研修訪中団実施要項

- | | |
|------------|--|
| 1. 団 名 称 | 公益財団法人日本中国国際教育交流協会視察研修訪中団 |
| 2. 目 的 | ・中国宋慶齡基金会との「新たな教育交流プロジェクト」についての意見交換
・基金会が運営する「中国宋慶齡青少年科技文化交流中心」及び「幼稚園」の見学
・北京市内の史跡等の研修 |
| 3. 訪 問 期 間 | 2019年9月6日(金)～8日(日) 2泊3日 |
| 4. 訪 問 地 | 北京市 |
| 5. 受 入 団 体 | 中国宋慶齡基金会 |
| 6. 参 加 人 数 | 9名 |
| 7. 訪 問 内 容 | ①中国宋慶齡基金会
②中国宋慶齡青少年科技文化交流中心
③宋慶齡幼稚園
④宋慶齡故居
⑤中国国家博物館
⑥人民大会堂 |

(2) 視察研修訪中団参加者名簿・日程表

◎参加者 訪中団員 9名

	氏名	所属	役割等
1	黒田 文男	代表理事（元静岡県教職員組合中央執行委員長）	団長
2	中村 武志	理事（三重県教職員組合中央執行委員長）	副団長
3	井上 定彦	評議員（島根県立大学名誉教授）	
4	小串 吾郎	評議員（山梨県教職員組合執行委員長）	
5	鈴木 伸昭	理事（静岡県教職員組合中央執行委員長）	
6	杉山 繁	団体会員代表（茨城県教職員組合執行委員長）	
7	前嶋 徳男	理事（元三重県教職員組合中央執行委員長）	
8	赤岡 直人	業務執行理事（元山梨県教職員組合執行委員長）	秘書長
9	秋山 俊一	理事（山梨県公立小中学校長会長）	副秘書長

視察研修訪中団日程表

◎日程

- 6日(金) 出発(東京=羽田) → 北京市
 - 6:30 集合 羽田空港国際線JTBカウンター前
 - 8:30 羽田発CA0184
 - 11:20 北京着
 - 14:00 宋慶齡青少年科技文化交流センター施設見学(2時間)
 - 16:00 宋慶齡基金会幼稚園見学(1時間)
 - 17:00 中国宋慶齡基金会表敬訪問(2時間30分)
 - 会見・晩餐会への基金会出席者
 - 宋 健 基金部巡視員(基金部部長)
 - 周 露 基金部項目総合処主任科員
 - 袁 振雅 基金部項目総合処項目主管
 - 張 晨 通訳
 - 19:30 泊:ノース・ガーデン・ホテル・王府井
- 7日(土) 北京市
 - 7:00 朝食
 - 9:30 中国国家博物館見学(2時間)
 - 11:30 昼食会場へ
 - 12:00 昼食
 - 13:30 宋慶齡故居周辺の散策
 - 16:00 ホテル着
 - ※国慶節(建国70周年記念)記念活動・軍事パレードリハーサルのため故宮周辺が交通・外出規制
 - 18:00 夕食
 - 泊:ノース・ガーデン・ホテル・王府井
- 8日(日) 北京市
 - 7:00 朝食
 - 9:00 ホテル発 バス(マイクロ)

○10:30 北京空港着
※台風来襲のため羽田行きが欠航

○16:00 宋慶齡基金会ホテル着

○18:00 夕食
泊:宋慶齡基金会ホテル

9日(月) 北京市 → 帰国(東京=羽田)

(3) 訪中団感想文

刺激を糧に

理事 中村 武志

二度目の中国訪問

9月6日、日本に接近しつつある台風15号を少し心配しながら、快晴の北京空港に降り立ちました。私にとっては二度目の訪中。前回は2013年8月18日から河北省易県の小学校を中心に中国の義務教育事情を学びました。かつて寒村と言われた易県にも高速道路のインターチェンジが開通し、タワーマンションも建設中でまさに「破竹の勢い」の中国を実感しました。

訪問した小学校の一つはいわゆる「実験校」だったのでしょう。十分な施設設備、意欲にあふれた教職員集団のもと、幼いながら「この地域・この国を背負っていくぞ」と言わんばかりの集中力で学習に取り組む子どもたちがいました。もう一つの学校はいわゆる「僻地校」。経済開発がこれからという地域で子どもたちの学習権をいかに保障していくか、という命題を熱心に追及する教職員やそれを支える行政関係者、そして自らの夢の実現とその人たちの期待に応えようとする子どもたちの姿がありました。

いい表現かどうかわかりませんが、「エリート養成」と「ナショナルミニマム」の達成と水準の向上という二つの命題に同時にとりくみ、それらを達成しつつある中国のエネルギーに感服させられました。

あれから6年。「破竹の勢い」を続ける中国、そして中国教育と子どもたちは、どんな「今」を示してくれるのだろうか?そんな思いで北京空港からのバスに揺られていました。

宋慶齡青少年科技文化センター

最初の訪問地は宋慶齡基金会が設立運営する青少年科技文化センター。子どもたち(ターゲットとしているのは日本でいえば小学校高学年から中学生くらいでしょうか)が最新に近い科学技術(ロボット工学やAI)を体験的に学ぶことができる施設。こういえば日本の多くの都市にもあるものかと思われるでしょうが、まず規模が格段に大きいのです。駆け足の見学にも関わらずすべてのコーナーを回るのに2時間以上かかりました。加えて科学技術だけではなく、書・陶芸・儒学を中心とする古典など中国の伝統文化を体験・学習するコーナーがあること。「和魂洋才」はもちろん日本の言葉ですが、この施設のコンセプトの一端を垣間見たように思いました。

今、日本は東京は別にしても、自治体の財政難等で子ども向けの社会教育施設の充実が脇に追いやられているように思います。学びたい時に、学びたいことを学べる環境はやはり大切。そう思うのに十分な時間でした。

宋慶齡基金会の幼稚園

科技文化センターの敷地内には宋慶齡基金会が設立し運営する幼稚園があります。そこを見学することができます。社会主义国家の幼稚園だから早期英才教育が行われているのだろう、それがまったくの誤解であることに気づくのにそう時間はかかりませんでした。たしかに、発達段階に応じた技能習得の活動もありましたが、ほとんどが遊び・お遊戯を中心とする活動で日本の幼稚園とその点ではあまり変わりがありません。しかし、決定的に違うのはスタッフの数です。20人弱の子どもたちに最低でも二人のスタッフ。集団での活動が苦手な子ども



がいるクラスにはさらに一人が（日本でいう支援員か？）つきます。「子どもの個性、その日の状態を何より大切にしています」というスタッフリーダーのお話を聞くにつれ、「子どもの姿、思い・願いから教育は出発する」というのは国に関係ない「一面の真理」だと思いました。また、朝7時半から午後5時頃までの保育時間、食事も幼稚園で用意すると聞き、この園に応募者が殺到するのは当然であるとも感じました。日本では10月から幼児教育の無償化が始まっています。それが教育のサイドから福祉・社会保障サイドからの要求から始まったのかは別として、今の日本に必要なことなのでしょう。しかし、大切にしなければならないのは、当然にもそこで展開される教育の質の保障です。幼児といつても、いや幼児だからこそさまざまな個性があります。その個性を認め、大切にしながら集団との関わりを高めていくのが幼児教育の本質の一つでしょう。それには質・数ともに十分なスタッフが必要です。

短時間の訪問でしたが、そのことを宋慶齡基金会の幼稚園は確実に追及していると感じました。

中国は依然として日々進歩している、教育を含めて。そう実感しさらなる刺激を受けた旅でした。

最後に、心配していた台風15号の影響で帰国を延ばさざるを得なくなった私たちに、宿舎の手配はじめご支援いただいた基金会の皆さん方に心より感謝申し上げ拙文を終えます。本当にありがとうございました。

充実した就学前教育

評議員 井上 定彦

5年ぶりの北京。この20年余の間には中国にはほぼ3～4年に一回は訪問。計7～8回の訪問ではある。とはいっても、北京、上海、廣東、深圳、廈門、青島、重慶、のいずれも短期間の訪問で、表面をなぞただけにとどまる。多くは産業振興や労使関係、高等教育をはじめとする教育の発展に興味があり、そのような会議に参加するためだった。それでも、この国が蒸進する発展の一端を感嘆の思いで見てきたところだ。高等教育については15年ほど前、中関村、北京大学・清華大学をはじめとして、上海の復旦大学、廈門大学について視察する機会を得た。産・学共同のイメージが強いものの、それだけではなく、学習意欲・向上意欲が強く勤勉な学生達をみると、この社会の発展がいまや最高潮に達していることを実感する。教育の普及・発展についても、日本の100年分、欧米の200年分を、わずか20～30年で追いつき・追い越すような勢いをいつも感じさせられた。

大学の進学率は2010年代に入っても急伸を続け、2012年の30%から2016年には43%へ、この2019年には50%を越える見込みとのことだ。また、義務教育期間（日本とおなじ9年間）を終え、高校以上に進学するものは94%ということで、殆ど日本と同じ。大学院以上の進学者数をみると単年度の募集数66万人、うち修士課程は58万人、博士課程は8万人ということだ。これだけでも先進国レベルに到達していることは間違いない。

すでにノーベル賞受賞者が出ていているが、これから中長期的にみれば、多数の受賞者ができるようになっても不思議はない。

他方、世界的に重視されるようになってきた幼児教育や保育を含む就学前教育の状況について、中国に関して日本でえられる情報はあまり多くはない。

今回の宋慶齡基金会幼稚園への訪問・視察は貴重な機会であった。宋慶齡青少年科技文化交流センターに併設されているこの幼稚園は、対象は3～6才児（三学年）を中心。ひとクラス20人程度、各学年は11クラスだと伺ったので幼稚園生の総数は600名程度ということ。日本なら最大規模の幼稚園ということになる。教諭は各クラスに担任と副担任、それに保育指導員の計三名で構成されている（これも日本の優良幼稚園とほぼ同じ）。違うのは朝7時30分から17時頃までという長時間預かりが標準だということ。おやつや昼寝、また三食ともに給食

ということも多いそうだ。私達の訪問時は午後4時前後だったが、こどもたちは疲れもみせずに各クラス毎にダンス、遊戯、紙芝居、立体組立て、玩具の自動車、行進行動ゲーム（解放軍風）、民族衣装のコスチュームと活発かつ整然としたチームワークで学んでいた。



来客である私たち視察團のためにわざわざ、いくつかのクラスのこどもたちに手をとってお出迎えいただき、それぞれ工夫された遊戯、ゲームの工作等をみせてくれ、また合唱・リズムの歌を聞かせていただいた。4才児にはみえないような立派な共同制作のモデル（怪獣など）は印象的だった。幼稚園というより小学校の低学年の印象すら感じられた。いずれもゆき届いた温かい指導があったものと思う。

運営・管理トップの李淑芳さんによると、幼稚園の全国の就園率は85%、北京は90%をこえるということだ。この幼稚園がそのモデルになりうるように努められているように受けとめた。

劉靜園長は、園児の日課について生活、活動、経験、お遊戯を組合せ、言語、社会、教科、健康にわたり、年令毎に工夫して行っているとのこと。カリキュラムが時間帯ごとにきめられ、3才はゲームを通じた教育、4～5才からは本人が自由にゲームをえらべるように工夫。「体育と知育」、保育園機能と幼稚園の学習機能を組み合わせた指導をしているとのこと。おちこぼれ対策についても質問したが、こどもが先生をえらべるし、また「マイペース」のこどもにはそれも許されていること。全体としては日本の「幼保一体型のこども園」に似た対応をしているものと理解した。うれしいことに、その4才児等がつくった金魚鉢を模した「うちわ」、水草と金魚がかわいらしく描かれたものをお土産にいただいた。

中国の都市部は、1979年から実施した「一人っ子政策」（2017年から「二人っ子」へと転換）と早くからの夫婦共働きが標準的であるため、0～2才までの乳児期を除くと（祖父母が養育するケースが多い）、3～6才の就園率が極めて高く早朝から夕刻までの預かりが多いそうだ。朝9時から午後2～3時までの日本の幼稚園とは違う。聞くところによると見学したこの幼稚園のように熱心で熟達した教諭、保育員がそろい子供たちの発達を系統的に支援しているところは決して多くはないようだ。学習的側面を強めた「幼稚園教育のモデル校」の意義をここがもっているように感じられた。

土・日はお休みのようだが、この長時間あずかりの関係で、準備を含めて教員・保育員の長時間労働が気になっていたが、質問をし損ねた。またこの幼稚園は0～2才の乳幼児についての託児所はもっていないので、そのうち3才児からの接続をどうしているのかも知りたいところだ。

日本から20年程の遅れで、人口減少と高齢化が展望される中、ひとりひとりの子どもを大切に育成してゆくこと、「ひとつくり」に国力の未来をかけたこの国の意気込みが感じられた見学だった。

「宋慶齡基金会幼稚園」を訪問して

評議員 小串 吾郎

昨年度に続き、今年度も多くの先輩方と一緒に訪中させていただき、とても貴重な体験をさせていただきました。今回も、「宋慶齡青少年科技文化交流センター」を訪問しましたが、センターを構成する、①体験館②芸術センター③幼稚園④劇場⑤ホテルのうち、「幼稚園」の施設見学や、李淑芳園長をはじめとする幼稚園のスタッフとの意見交換をさせていただきました。昨年は「体験館」を見学させていただきましたが、「好奇心・想像力・創造力」をテーマに、体験すること、好奇心を刺激すること、想像力を育成すること、創造力を奮い立たすことの相乗効果で教育していくという目標を掲げてとりくむ姿勢は、教



育のすべての場面にわたって貢かれていたと感じました。

日本と中国では、そもそも、幼稚園と保育園の仕組みや位置付けが違います。幼稚園や保育園で教育に従事する者には、日本と同じようにそれぞれの資格が必要ですが、中国では、0～2歳は保育園（託児）に通い、3歳以降はすべて幼稚園に通うことになります。幼稚園は子どもたちを7:30から17:00まで受け入れており、1日の時間割が決まっています。「生活」「活動」「勉強」「遊戯（ゲーム）」の4つの時間に分けられており、主に3～6歳の子どもを受け入れていますが、2歳半の子どもも1人受け入れているとのことでした。授業の内容は、「言語」「社会」「科学」「芸術」「健康」と5つの内容があり、3～4歳は主に言語教育・遊戯を中心に活動しています。4～5歳の子どもは自由に自分の興味のある遊びを自分で決めて行い、自分の能力や才能を発掘させることでした。5～6歳になると、チームワークで共同して何かをするということを教えるのだそうです。中国でも当然、子どもには個人的な差・それぞれの特徴があり、遅れをとってしまうような子もいるそうですが、その場合は個別に先生が付き添い、その子の発達のペースに合わせて教育を行っているとのことでした。付き添ってくれる先生を、子どもが選べるというシステムには驚かされました。

幼稚園に通うことのできる子どもは中国全土の約85%であり、政府も多くの子どもが入園できるように努めているということでしたが、北京市はもう少し高いようです。中国では、幼稚園によって等級があり、北京市では、宋慶齡の幼稚園と同じ様なモデルスクールの位置付けの幼稚園が何件かあるそうです。しかし、地方では未だにこういった幼稚園が少ないという現実があり、地域格差・経済格差が教育格差につながっているということは大きな課題です。質や規模は違っても、日本でも教育格差の問題は深刻化しています。特に、「一人っ子政策」によって特定の年代に人口抑制がかかってきた中国と、少子高齢化に拍車がかかっている日本とでは、これも質や規模や経過は違っても、労働力や福祉政策のアンバランスが懸念されることについては共通しています。どちらの国も、今後ますます、すべての子どもたちの学ぶ権利を保障することについて、公教育が果たすべき役割・責任は非常に重いはずです。



写真に映っているスローガンは、幼稚園の廊下に掲示されていたものですが、職員に意味を尋ねたところ、「初心を忘れず、しっかりと自分の使命を覚えておこう」と書いてあるのだそうです。教師によって「初心」はそれぞれ異なるかもしれません、ひとつ共通する部分があるとすれば、「子どもたちを中心に据える」ということを、判断や行動の基準にするということでしょう。これは、学校現場で子どもたちと向き合う者だけでなく、教育行政に携わる者も同じでなければ、いくら学校現場で職員が努力をしても、子どもたちの「ゆたかな教育」は実現しません。今後も、日中の教育交流を通じて、「子どもを中心とした」意見交換、実践交流ができればありがたいと考えています。

今回も貴重な機会をくださった日本中国国際教育交流協会の皆様に感謝申し上げますとともに、訪日団の皆様を10月に山梨で迎えるにあたって、実りある交流になることを願っています。

中国を肌で感じた3日間+a

理事 鈴木 伸昭

今回の中国訪問は、米中貿易摩擦や香港における抗議デモが報道を通じて話題となり、人々の関心が高まっている中での実施となった。政治的レベルでの課題がある時ほど、こうした民間レベルでの交流は大切であると言われる。特にスポーツや教育といった分野における交流は、政治的利害関係に翻弄されることなく、その理念や意義が尊重され、るべき姿を求めて交流が進められることが望ましい。だいそれた使命感というほどのものではないが、参加するにあたって、そんな気持ちになった。以前には河北省易県、山東省東平県といった郊外の地域を訪問し、現地教員の方々と交流をさせていただくことによって、同じ東アジアに生きるよき仲間としての認識をもつことができるようになった。今回の訪問もまた、その意識を高めてくれた感がある。

今回の訪問では、宋慶齡基金会が創設した青少年科技文化交流センターを視察する機会を得た。3年前に出来上がった施設ということであるが、未来を見据えた先進的な科学技術、中国の歴史や風土を大切にした伝統的技能、心身の発達の基盤となる幼児教育等を体験的な活動を通して学ぶことのできる施設であった。舞台芸術の発表もできるステージとホールも備えた規模の大きな施設で、教育振興に向けた基金会の並々ならぬ意気込みが感じられるものであった。また、センターでは「学前教育」を重視すべき柱の一つとして幼稚園を併設しており、その様子を参観させていただいた。それぞれのクラスでは、子どもたちが複数の教員や保育員と共に笑顔で活動をしていた。施設の充実だけでなく、人的な配置についても充実している様子が見受けられた。いくつかのクラスでは私たちのために歓迎の歌を歌ってくれたり、演技を披露してくれたりした。日本においても就学前教育は近年重視されているが、ここ中国でも同様に注目されていることが窺われた。園長さんの話によれば、中国全土での幼稚園への就学率は約85%ということであったが、広大な国土と十数億の人口に加え国民の経済格差が残る大国であることを考慮すると、失礼かもしれないが若干の驚きを以て受け止めた。実際に個々の現場を見ればおそらく格差の実態があると推察されるが、大きな流れとして国力増強につながる教育充実のために、今後も力を入れていく部分であろうということが実感として感じられるものであった。いずれにしても、交流センター並びに幼稚園の関係者の皆様には、大変丁寧な対応をしていただいたことに心から感謝の意を表したい。

今回のもう一つの貴重な視察体験として、中国国家博物館の見学があった。館内に入ると、そのスケールの大きさに圧倒された。入ってすぐのホールはサッカーコートが一面取れるのではないかと思うほどの広さで、天井の高さも大きなアリーナのようであった。そして、そのスケールの大きさだけでなく、中国四千年の歴史を凝縮したような貴重な展示物が並んでいた。ガイドの左さんに丁寧な説明をしていただいたおかげで有意義な時間となつたが、約一時間の鑑賞だけでは歴史のほんの一端を垣間見たに過ぎないことは容易に想像できるものであった。

今回の訪問では、いくつかのアクシデントもよき思い出となった。今年、中国では建国70周年を迎え、10月1日の建国記念日を含めた国慶節は例年以上の盛り上がりらしい。ちょうど訪中2日目の夜が、そのセレモニーのリハーサルがあるとのことで、ホテルから外出禁止の軟禁状態となってしまった。一時は「戒厳令」が敷かれるとの情報もあり少し面食らったが、それほどではないにせよ、こうした制約が旅行者レベルにも影響を及ぼすことを体感した。また、帰国時に台風15号の影響により予定していた帰国便が欠航となり、一泊追加となった。

しかし、宋慶齡基金会のご配慮により交流センターに設けられた宿泊所に泊まさせていただくというお土産もついた。ただ帰国すると、千葉県を中心に関東一帯で想像以上の被害があり、不便な生活を余儀なくされる方々のニュースが報じられた。私たちのアクシデントなど取るに足らないものであり、ご苦労されている方々の一日も早い日常生活の復旧を願う日がしばらく続いた。いずれにせよ、中国の様々な側面を肌で感じることのできた3日間+aであった。



訪中団に参加して

団体会員代表 杉山 繁

飛行機の窓から見える北京の街は、うっすらとスモッグに覆われていました。初めて降り立った中国の玄関口である北京首都国際空港は、日本の空港とは比べようなく広く、ターミナル内の移動にも無人シャトルに乗らねばならず、その全体像がつかみきれませんでした。空港から市内に向かうバスの車窓からは、高層ビルが林立する近代的な街並みに圧倒されながらも、緑が多いことから、落ち着いた雰囲気も感じられました。

北京名物（？）の交通渋滞に驚きながら、最初に訪問したのが「宋慶齡青少年科技文化交流センター（以下、センター）」でした。あまりの壮大さに圧倒されるとともに、宋慶齡さんの偉業を改めて偲ぶことのできる建物でした。センターは5つのエリアから構成されており、中でも「体験館」はフロアごとにテーマが設定されており、子どもたちが遊びながら楽しく科学を学べる施設になっています。

また、伝統文化や伝統技術を体験するフロアもあり、「京劇」や「漢方薬」のコーナーは中国を感じさせるものでした。一人っ子政策による少子化や急速な近代化により、古いことを知らない子どもが増えていることから、こうした施設の役割は高まっているということです。

次に、センターのエリアの1つ「幼稚園」を見学させていただきました。かわいい子どもたちの出迎えを受け施設に入ると、まずはその贅沢なつくりに驚きました。屋外は肌を焼くような暑さにもかかわらず、室内はエアコンはもちろん、空気清浄機が設置され、快適な環境の中で学ぶことができます。さらにオープンスペースが各所に配置され、学習内容に応じて、教室との使い分けがされていました。

中国では3歳から入園することができ、国内の就園率は85%で、北京市ではもっと高くなっているそうです。また、都市部では共働き家庭が多いことから、この幼稚園では7:30から17:00まで子どもを預けることができるそうですし、驚いたことに朝食も提供されるということです。

また、時間割がきちんとつくられており、学習内容は「生活」「活動」「勉強」「遊戯（ゲーム）3～4歳：創造4～5歳」に大別され、さらに「勉強」は、「言語」「社会」「科学」「芸術」「健康」に分けられるそうです。私は中国語ができないので、一人の子に「何歳？」と英語で聞いたところ、「5歳」と答えたことから、英語学習も行われているのだなと感じました。

1クラスの人数は20人程度で、2人の先生と1人の補助員の3人体制で指導しています。クラスの人数が少ないので少子化の影響だということですが、日本の現状を考えると羨ましい限りです。さらに、日本では先生不足が問題となっていますが、若い先生（ほとんどが女性）が多いことにも驚きました。幼稚園の先生になるには、いくつかの方法があるのですが、資格が必要なことから、一人ひとりの資質が高く、さらに教員としての誇りややる気が感じられました。

近年、中国では教育は国民生活の最優先事項とされ、教育体制や教育内容をはじめとする教育改革の充実に多額の教育費が投入されてきました。PISA調査の結果に、中国の都市がいくつもランクインしているのはその表れかもしれません。

今回訪れた幼稚園はモデルスクールではありますが、これから中国がめざそうとしている科学技術教育立国の源流を見たように思います。今後、中国全土に教育が行き届き、都市部と農村部の差がなくなった時、さらに国力が向上していくことを考えると、あまりにも場当たり的な日本の教育政策に、大きな不安や不満を感じずにはいられなくなったりました。



現場の教育交流をさらに拡げ、深めよう

理事 前嶌 徳男

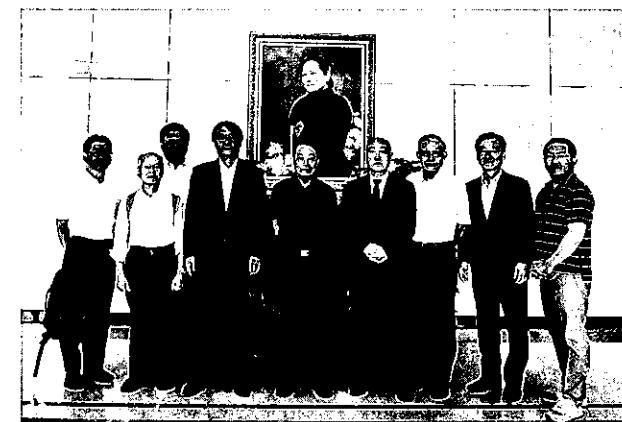
今回の訪中の目的は、宋慶齡基金会との15年間の交流をふまえ、より一層の連携、今後の方向の意見交換、そして「宋慶齡青少年科技文化交流センター」、北京市の史跡等の視察であり、わずか3日間であったが、わたしにとっても意義深いものであった。

「科技センター」、莫大な予算もかけ、最先端の科学、技術、文化を次世代の子どもたちに、という決意がうかがえた。

併設されている基金会の幼稚園では、朝7時30分から午後5時まで、3才～5才の1クラス20人～25人の子どもたちを3人の先生が指導しており、日本と比べ時間は長いがクラスの人数は少なく、教員の数は多かった。これが中国全て、そうなのかなははっきりしなかった。活動内容は日本の幼稚園と大差なく、ゲーム、遊戯、自由に興味ある活動を行い、チームワークや共同で活動をしながら人間性や能力をつけていくというものであり、教え込むというようではなかった。幼児教育に携わっている現場の教員の参加があればもっとよかった、と思った。中国も日本も少子化がすすみ、今まで以上に教育に対する期待や重要性が求められる中、あらためて現場の教育交流を拡げ、深め、広い視野で教育にとりくむことが大切だと思う。

中国へは私事旅行も含め10回程訪れたが、最後に行ったのが12、3年前だったので、北京の変容には目をみはるものがあった。街が清潔になったこと、車が増えたこと、又、バイクの9割程は電動であったこと、地下鉄が大きく発達したこと、近代的な高層ビルが林立していること、そして私たちが滞在している時はあまり煙っていなかったが、季節によってはPM2.5等の問題があるのだろうと思った。

さて、田中一郎会長が生前、海外に研修に行くのは、見学もさることながら、海外から日本をみて、問題や課題を認識することが大切と言われた。安倍政権は中国を敵視し、アメリカとともに封じこめようとしていたが、世界情勢の変化もあるのだろうが、来年の習近平主席の来日に向け必死ともいえる。中国国家博物館での紀元前からのすばらしい作品等を見て、それらに日本が学んだ歴史を踏まえ、これからもともに信頼、協力すべきことは言うまでもない。接した中国人たちは、わたしたちに好意的であった。民間交流を重ね、深めながら、中国の人たちとわたしたち、中国と日本がよりつながっていくことを求め、当財団もその役割を果たしていくべきと思う。



日本中国国際教育交流協会視察研修訪中団に参加して

理事 秋山 俊一

2019年9月6日、午前8時30分にCA0184便は羽田空港を離陸し、北京へと向かいました。日本中国国際交流協会の視察研修訪中団の一員として再び中国を訪れ視察研修をさせていただく機会を得ることができ心から感謝をしています。

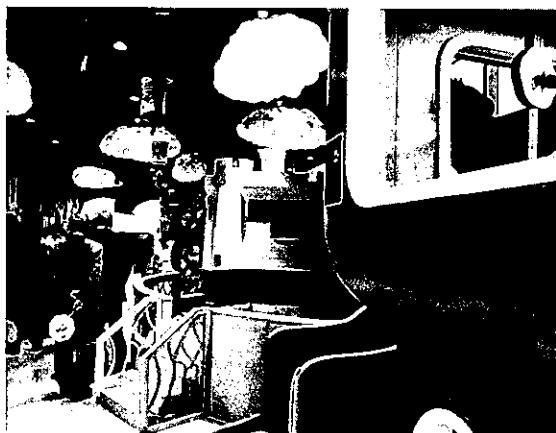
機中にて、私は今を去ること15年前の2004年9月21日から9月27日の7日間、田中一郎会長・理事長を団長とする日本中国国際交流協会第12次訪中団の一員として中国を訪問させていただいた時のことを思い出していました。この第12次訪中団は、まず、北京市内街中にある、かつて中国教育省実験学校であった「北京二龍路中学校」を訪問し、授業の様子を見学させていただくとともに中学校教育の状況を校長先生からお聞きしながら中学

校教育にかかる意見交換をさせていただきました。続いて、『私立重点学校』として2001年に設立された『北京育英実験学校』を視察させていただきました。この北京育英実験学校は、小学校・中学校・高等学校からなり2,500名の児童生徒が全寮制で学んでいる学校であり、広大な敷地のなかにトレーニングセンター・国際学校、外国語学校も併設され、まさに「教育の拠点」を目指している『実験学校』であることが強く印象に残っていました。さらに、教育交流集会では、日本中国の双方からそれぞれの教育課題や情報提供があり、有意義な時間をすごさせていただいたことを当時の報告書を読み返しながら思い出していました。今回の視察研修では、「宋慶齡青少年科技文化交流センター」ならびに「宋慶齡基金会幼稚園」の見学が計画されており、中国における青少年教育施設ならびに幼児教育の状況を視察させていただくことがとても楽しみでした。

北京空港から「宋慶齡青少年科技文化交流センター」へ到着し、早速に施設の概要説明をお聞きし、施設内の見学をさせていただきました。センター内は、各階に渡って、遊びながら学びを習得する施設や文化・芸術にいたるまで様々な体験ができる幾つものスペースやブースが設営されており、その施設・設備の充実した様子には大変驚かされました。子どもたちの成長発達段階に応じて、興味関心を掻き立てながら学びが深まる工夫が随所に盛り込まれている素晴らしい施設でした。

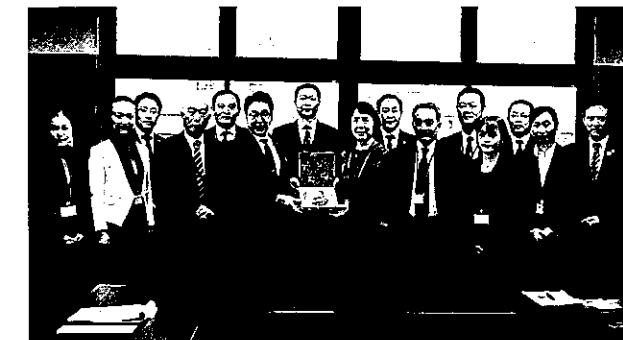
続いて、同センターに隣接している「宋慶齡基金会幼稚園」の視察をさせていただきました。入口で、可愛らしい幼稚園児4名の出迎えを受けました。園内に入り、まず目に飛び込んできたのは、充実したライブラリー・読書スペースでした。続いて、「小(Bottom Class)一班」の教室から順に「中(Middle Class)」「大(Top Class)」の子どもたちの学びの様子を見学させていただきました。園児がそれぞれの先生方の指導のもと、自らのアイデアで作品づくりをしている様子、Building Roomで建物や橋を工作している様子、さらには、私たちを招き入れ一緒に手遊び歌をおこなったり合唱を発表して聴かせてくれたりしました。どの子どもも表情が豊かで、たいへん生き生きとしており、先生方の指導がきめ細かく丁寧で、しかも子どもたち一人一人を大切にしながら行き届いた教育がなされているという印象を受けました。特に、フリースペースで先生が子どもたちに読み聞かせをしている場面では、先生の教育技術がとても優れており感心させられました。また、園内各階のオープンスペース、廊下には子どもたちの作品や情操教育のための工夫が至る所になされていました。この幼稚園には、「宝宝(Baby's Class)」も併設されていました。施設の充実はもとより、先生方が教育理念を共有して園児の教育指導にあたられており、素晴らしい教育がおこなわれていると感じました。

今回の視察を通して、中国における青少年教育ならびに幼児教育の充実した様子を理解させていただくことができました。ほんとうにありがとうございました。

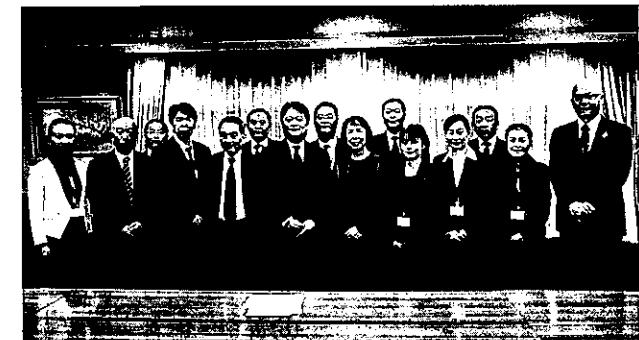


第5次宋慶齡基金会教育交流代表団・第4回日中音楽教育交流会（教育交流 受入事業）

10月17日（木）～20日（日）の4日間、山梨県笛吹市を中心に、「第5次宋慶齡基金会教育交流代表団」の受入が行われました。これは教育交流受入事業としての取り組みで、「宋慶齡基金会及び基金会が推薦した東平県の音楽教師と音楽教育を中心とした教育交流・研修を行う。」「第4回日中音楽教育交流会を開催する。」を、具体的な目的として行われました。訪日代表団は、宋慶齡基金会基金部項目総合所長の劉さんを窓口に、山東省泰安市東平県教育局の全面的な協力の下に編成されました。また、「第4回日中音楽教育交流会」については、これまでと同様に、日本中国国際教育交流協会・中国宋慶齡基金会・東平県教育局の三者の共催という形で行いました。団の編成は、宋慶齡基金会基金部湯副巡視員を団長として、秘書長に基金会基金部袁項目主管、山東省泰安市東平県教育局学生出資援助センター史主任他6名が団員という全8名による代表団の構成でした。代表団の受入については、協会の評議員である山梨県教組の小串委員長の全面的な協力を得て行われました。また笛吹市教育委員会、笛吹市教育協議会の受け入れという形で、学校視察研修並びに音楽交流会が、笛吹市の教育関係者も参加する中で、笛吹市立春日居小学校を会場に行われました。



笛吹市長表敬訪問記念写真



山梨県知事表敬訪問記念写真

（1）第5次宋慶齡基金会教育交流代表団受入要項

- | | | | | | |
|-------------|--|-------------|------------------------------|-------------|---|
| 1 目的 | <ul style="list-style-type: none"> • 宋慶齡基金会との共同プロジェクト（日中教育交流）の一環として実施する。 • 宋慶齡基金会及び基金会が推薦した東平県の教育局・音楽教師と音楽教育を中心とした教育交流・研修を行う。 • 第4回日中音楽教育交流会を開催する。 | | | | |
| 2 実施年月日 | 2019（令和元）年10月17日（木）～20日（日） | | | | |
| 3 代表団員 | (代表団名簿参照－別項) | | | | |
| 4 受入責任者 | 公益財団法人日本中国国際教育交流協会
代表理事 黒田 文男
評議員 小串 吾郎
業務執行理事 赤岡 直人 | | | | |
| 5 交流予定 | <table border="0"> <tbody> <tr> <td>1日目（17日＜木＞）</td> <td>来日
東京から山梨へ移動
(山梨県笛吹市泊)</td> </tr> <tr> <td>2日目（18日＜金＞）</td> <td>笛吹市立春日居小学校における交流
(校内施設見学・授業参観・音楽科研究授業及び第4回日中音楽教育交流会・給食試食)
笛吹市長・笛吹市教育委員会表敬訪問
山梨県知事表敬訪問
歓迎レセプション
(山梨県笛吹市泊)</td> </tr> </tbody> </table> | 1日目（17日＜木＞） | 来日
東京から山梨へ移動
(山梨県笛吹市泊) | 2日目（18日＜金＞） | 笛吹市立春日居小学校における交流
(校内施設見学・授業参観・音楽科研究授業及び第4回日中音楽教育交流会・給食試食)
笛吹市長・笛吹市教育委員会表敬訪問
山梨県知事表敬訪問
歓迎レセプション
(山梨県笛吹市泊) |
| 1日目（17日＜木＞） | 来日
東京から山梨へ移動
(山梨県笛吹市泊) | | | | |
| 2日目（18日＜金＞） | 笛吹市立春日居小学校における交流
(校内施設見学・授業参観・音楽科研究授業及び第4回日中音楽教育交流会・給食試食)
笛吹市長・笛吹市教育委員会表敬訪問
山梨県知事表敬訪問
歓迎レセプション
(山梨県笛吹市泊) | | | | |